

橋梁設計のスペシャリスト 編

[登壇者] 松村 博

大阪市の職員として20年にわたって橋梁事業に携わり、橋の歴史・景観論に関して多数の著書が出版されている松村博さん。日々の業務を通して、常に橋のあるべき姿を追求してきた松村さんに、土木技術者が社会に果たす役割と仕事に対する信念を伺う!

腕 学生時代は発掘に夢中

物心がついた頃から漠然と「ものづくりにへの憧れ」を抱いていた松村さんは、京都大学大学院で耐震構造解析分野を専攻された後、大阪市の土木局橋梁課に奉職された。当時は大阪万博の直前で、さまざまな社会インフラが急ピッチで整備されようとしていた時代である。就職先として大阪市を選んだのは「役人だったら自分の目指している橋がつくれる!」との思い込みからだった。うだが、結果としてはけっこう思い通りの橋をつくることができたそうだ。

そんな松村さんだが、大学時代に夢中になったのは考古学だった。大学時代には「考古学研究会」に籍を置き、長期休みになるたびに発掘調査に「うつつを抜かしていた」そうだ。「考古学は掘ったら発見がある。具体的な成果が見えるのはものづくりと一緒」らしい。学生時代に考古学を通して歴史と向き合ったことが、後の橋梁設計などの仕事において「少しは幅ができたかも知れない」と言う。

腕 住民からの猛反対

橋梁課での仕事を始めた頃、これからの仕事に疑問を感じる出来事があった。それは開かずの踏切を解消するための高架橋の建設に関する住民説明会でのことであつた。松村さんから大阪市の担当者が高架橋の利便性と必要性を何度も説明したにもかかわらず、周辺の住民から猛烈な反対を受け続けたのだ。市民の生活を豊かにすることが目的で高架橋の建設を進めているにもかかわらず、住民からの反対を受けたことに、自分のつくりようとしているものが、本当に住民のためになっていないのではないかという無力感を感じたそうである。「都市機能を充実させるために土木構造物は必要であるが、巨大化した構造物が付近の生活者を疎外してしまっているのではないか?」結局この高架橋の建設は数年にわたって凍結され、最終的には住民の主張のように鉄道を高架にするように

計画が変更され、実施されたそうだ。また、その後の建設においても、周辺住民からの反対や苦情を受けることはめずらしいことではなかった。「橋の必要性を理解してもらえば、後は個別に事情を聴き、丁寧に対応するしかない。説得のためにいわゆる夜討ち朝駆けはよくあつた」と言う。

このような出来事がきっかけとなり、「地域に受け入れられる橋とは何か?」というテーマに思いを巡らせる日々が始まった。その中で導き出した一つの答えは、地域に適合したデザインを追究していくことであつた。歴史ある大阪の地において、地域の歴史や風土を踏まえ、周囲の景観に調和した橋ができれば、「地



写真1 ご自身の経験を熱心に語ってくださる松村氏



写真2 此花大橋の前で記念撮影(最右が松村氏)(提供:松村博氏)
此花大橋(1979年着工、1990年完成)は1990(平成2)年度の
土木学会田中賞を受賞

分のやりたいことを形にしていくのは難しい。しかしたとえ公共事業であつても5%ほどのグレードアップなら認められるのではないか。そして5%程度であつても、今までにないものを実現するための努力をすることが重要」なのだそうだ。「どんなに小さな橋であつても、自分なりのテーマは見つけられるはず。他人に委ねるのではなく、こだわりを持つて仕事に取り組みたい。おいしいところを他人に譲り渡すな!」その代わり

批判は甘んじて受けなければならぬ。そしてその仕事の内容を活字に残す義務がある」と語る松村さんから、土木技術者のやりがいと、土木技術者が背負わなければならない責任感にしみ出る。

松村さんにとつてのこだわりは、橋本来のあるべき姿の追求でもあつた。「最近、各地で個性的な橋がつくられるようになったが、橋のデザインを、橋を飾ることと勘違いしているものもある。橋の魅力は基本的には構造的必然性の中にある。その上で橋そのものと橋を利用する人びととの関係を見つめ直し、トータルでデザインすべきだ」と指摘する。

腕 取材を終えて いつまでも素人

橋の景観や歴史に精通し、多くの著書をお持ちの松村さんであるが、取材中たびたび口にされる言葉があつた。「自分は素人」というフレーズである。「スペシャリストというのは、変に悟っているというイメージがあるし、自分にはふさわしくない。自分は何が専門なのかいまだにわからない。スペシャリストにもゼネラリストにもなりきれない。だから常に好奇心を失わず、素人であることと認識していることが大切であると思

まつむら・ひろしさん

1944年、大阪市生まれ。京都大学大学院土木工学専攻修了後、大阪市土木局橋梁課に奉職。20年にわたり橋梁事業に携わり、神崎橋、川崎橋、此花(このはな)大橋、平野川水系の橋梁架け換えなどを担当。後には都市計画行政を担当。以後、大阪市都市工学情報センター理事長、阪神高速道路(株)監査役などを歴任。『大阪の橋』、『日本百名橋』、『橋梁景観の演出』、『大井川に橋がなかった理由』、『江戸の橋』など著書多数。

腕 5%へのこだわり

域の橋」として住民から受け入れられるのではないかと考えたのだ。

松村さんは、橋のハード面だけでなく、橋を渡る人、さらに見る人の快適性というソフト面の重要性を認識していった。さらに、景観をつくり上げていく歴史的背景にもスポットを当て、地域の歴史性を表現した橋の必要性も提案した。

橋の設計に対して独自の考え方をもちの松村さんには、仕事をするうえで常に心がけてこられたことがある。それは「5%へのこだわり」だ。松村さんによると「誰しも日々の業務に追われ、自

う」と語る松村さん。専門分野を追求し続ける姿勢の裏には、決して好奇心を忘れない「素人」の信念があるのだ。

退職後の松村さんから、「橋マニア」の心が失われることはない。最近は大阪に残る江戸時代の古文書から当時の橋を復元したり、世界各地の橋の歴史やデザインとその都市や地域とのかかわりを考察したりするなど、新たなフィールドを開拓しようとしてきている。「歴史研究については未熟でも、技術者の目を通してしか見えてこない歴史的現実もあるはず」と言う。スゴ腕技術者が持ち続ける「素人の精神」。素人のわれわれは見習わなくてはならない。

今月のスゴ腕技術者からの一言

現在は、かつてのようにどんどん新しいものをつくる時代ではなくなったが、その分じっくりと考えられる時代かもしれない。さらに、これまでになかった新しい価値を見出す仕事など、必要とされている仕事はたくさんある。だから、広い意味でのものづくりに魅力を持ち、若い時にこそものづくりに必要な「構造的センス」を身につける努力をしてもらいたい。加えて、自分の考えを活字にする訓練をしておくことも必要だと思う。

学生編集委員 澤村康生、篠崎真澄